

後漢期、皇太后・宦官の支配様式

好 並 隆 司

〈序〉 「後漢書」卷七十八、宦者列伝の末尾の「論曰」に「自古喪大業絶宗禪者、其所漸有由矣。・・西京自外戚失祚、東都縁闕尹、傾国・・」とあって、後漢の衰退は宦官によるものと述べている。宦者列伝の記述であるから、それを強調する傾向は有るものの、それにしても後漢王朝衰退の大きな原因の一つが宦官の権力化にあることは誰しも否定出来ないであろう。この宦官の背景に皇太后専政の存在する事は、既に拙稿^註で論じて来たところである。本稿では宦官の存在形態に焦点を当ててその支配様態を分析したいと思う。

〈1〉 宦者列伝の冒頭に「中興之初、宦官悉用闕人、不復雜調它士。至永平中、始置員数。中常侍四人、小黄門十人」とあって、後漢では闕人を用い、その定員数が決められた。そして「和帝即祚幼弱而竇憲兄弟專総權威、内外臣僚莫由親接、所与居者惟闕宦而已。故鄭衆得專謀禁中、終除大慙、遂享分土之封。超登宮卿之位。於是、中官始盛焉」（後漢書卷七十八）とあって、四代目の和帝が即位したのが十歳であったので、竇太后が「臨朝」した。彼は本来、梁貴人の子であったが、「竇后養帝以為己子」（後漢書卷四）とあって、太后は自分の子として養ったと言う。こうして見るならば、宦官が勢力を持つ始めは「竇太后臨朝」のように「女主」支配を契機とすることが解る。女主の場合、側近には宦官が配置されて政務を執行しているのが通常である。和帝が皇太子になったのは建初七年であったが、「集解」に依ると「東觀記、上幼岐嶷、至総角、孝順聰明、寛和篤仁。孝章由是、深珍之、以為宜承天位。年四歳以皇子立為太子。初治尚書、遂兼覽書伝、好古楽、道無所不照」とあるように、彼は幼児より才知がすぐれていたもので、章帝は彼を評価し天位を承ける者すなわち、皇帝の資格を有すると評したのである。そして彼は尚書を学び、書伝を閲覧したとあって学問を好んでいる。帝は太后の退いた永元四年の後「永元七年・・是時、和帝与中常侍鄭衆・・幸常侍蔡倫二人始並用権」（後漢書卷二十六）とあり、この宦者兩人を併用して執権する。このうち鄭衆は「独一心王室」を以て執務したけれども、倫のほうはやがて失脚する竇氏の意を受けて安帝の祖母を陥れたため、孫の帝が親政した際、彼は自殺に追い込まれた。帝と太后の双方の間であって、中常侍が帰趨に迷うことが生じるわけである。鄭衆は費氏易・毛詩を学び蔡倫は「各讐校漢家法、令倫監典其事」（後漢書七十八）とあって、学の内容は両者で異なっていた。

和帝期の権力配置を見ると、女主専権期では竇憲が大將軍就位によって、三公の上位に位置して外朝を抑制しつつ太后を支えた。「和帝即位、太后臨朝。憲以侍中、内幹機密出宣誥命。肅宗遺詔、以篤為虎賁中郎將、篤弟景・瑗並中常侍。於是、兄弟皆在親要之地。憲以前大尉鄧彪有義、讓先帝所敬而仁厚委隨。故尊崇之、以為太傅、令百管総己以聽其所施為輒外令彪奏內白。太后事無不從。又屯騎校尉桓郁累世帝師、而性和退自守。故上書薦之、令授經禁中。所以內外協附莫生疑異」(後漢書二十三)とあって、憲は始め侍中に位置していて、内朝の機密を司りその兄弟を中常侍に配して、太后政治の実務を執行した。外朝には、鄧彪が先帝の尊崇する人物であったので、これを太傅に任じて百官を統べさせた。亦、桓郁は歴世、帝師であったので、禁中において經典を講じさせた。こうして上文のように、内外協附と言う安定した状況が現出した。更に景・瑗以外の側近である中常侍については帝と太后の双方に比重の重点が分かれた。程衆の場合は前者にあり、蔡倫では後者にあったようである。ところで、この安定した和帝期の権力機構が擾乱される契機は竇憲本人にあった。西域で勝利して、やがて大將軍になり幕府を置く。それによって「權貴顯赫、傾動京都」とあって、とりわけ景は「侵陵小人、強奪財貨」との行為があったので、太后はその官位を剥奪している。更に「憲女婿・射声校尉郭举、举父・長樂少府璜皆相交結。元・举並出入禁中、举得幸太后。遂共圖為殺害。帝陰知其謀、乃与近幸中常侍・鄭衆定議誅之、以憲在外、慮其懼禍為乱忍、而未発。・・憲・・還京師・・閉城門、收捕疊・磊・横・举、皆下獄・・収憲大將軍印綬・・就国」(後漢書二十三)とあって、帝の殺害を謀ったと言う名目で、鄭衆ら宦官は竇氏を一掃する。

(2) 安帝は章帝の孫であるが「年十歳、好學史書。和帝稱之」(後漢書五)とあり、恵棟の注に「東觀記、孝安皇帝、清河孝王第二子也。少聰明、敏達、慈仁惠和、寬容博愛、好樂施予。孝王常異之。年十歳、善史書、喜經籍。和帝甚嘉重焉。号曰、諸生。數燕見在中、特加賞賜下及玩弄之物。諸王子莫得与比」とあって、彼も幼少から聡明で寛容な資質をもち、十歳で史書・經籍を好んだと言う。延平元年八月に殤帝が崩じ、安帝が即位する。年十三歳であった。従って鄧太后が引き続いて「猶臨朝」した。このとき宦者孫程が中黄門として長樂宮に給事している(後漢書・卷七十八)。この太后の統治は十六年の永きに亘り「時鄧太后臨朝、帝不親政事」(同 前)とあるが、太后の晩年になると、帝の不満は漸く昂じていたらしい。それは「太后兄、執金吾悝等、言欲廢帝、立平原王翼、帝每忿懼」(同 前)とあって、直接的には太后の兄による安帝廢位の企図が察知されたことが契機となっている。太后が崩じるに及んで鄧氏は排除されるが、その局面では李閎・江京が中常侍の位置にあり、彼らを中心として、他に樊豐・劉安・陳達・王聖、聖女伯榮が一派閥をなしていた。そして帝舅・大將軍耿宝、皇后兄・大鴻臚閻頭らが、それとは別の一党派を形成していた。この両党派が外朝の大尉・楊震を枉殺すると共に、皇太子を廢して濟陰王に降格させる。その理由は「母李氏為閻皇后所害」(後漢書六)の事件が先にあり、「太子數為歎息。王聖等懼有後禍。遂与豐・京共搆陷太子」(同 前)とあって、江京らが後の禍を懼れたためだと言う。

そして彼らは安帝の崩御に当面して、北郷侯を挙げて天子とした。こうして閻頭が主導して、「誅樊豐、廢耿宝、王聖、及党与皆見死徙」（同 前）とあるよう他派を排除する。そして延光四年に北郷侯が立ったが、その十月、北郷侯は病の重い状態に陥った。この時、孫程は済陰王の謁者に次のように言っている。「王以嫡統、本無失徳。先帝用讒、遂至廢黜。若北郷疾不起、共断江京、閻頭、事乃可成・・又中黄門南陽王康、先為太子府史、自太子之廢、常懷歎憤。又、長樂太官丞京兆王国、並附同於程」（同 前）とあり、又「初帝廢為済陰王。乳母宋娥与黄門孫程等共議立帝」（後漢書九十一、左雄）とあって、孫程は元もと嫡統である済陰王を支持し続けていた事が解る。そして旧太子府にいた王康を始め、長樂太官・王国らも亦、孫程に同調して、江京・閻頭らを討つ企てをした。その後、十月二十七日になって北郷侯が薨じ、それを承けて十一月二日に孫程・王康ら十八人が決起し、江京・劉安・陳達を斬り、李閻を威嚇して済陰王を迎えて帝位に就けた。これが順帝である。こうして「令侍御史収頭等送獄、於是遂定」（同 前）と頭らが獄に送られて、事件は終わったのである。

この件に関して、「立順帝、会孫程等事先成。故郤功不顯。漢中太守郤進諫曰、竇將軍淑房之親、不修礼徳而專權驕恣・・願明府一心王室・・郤陰与少府・・陶範・・謀立順帝。会孫程等事先成、故郤功不顯」（後漢書卷百十二上）とあるように、順帝擁立の件は「一心王室」の立場から進められていたらしい。孫程の場合も亦、太后・外戚に依らず、帝に依拠する立場を採っている。禁中の宦官はこのように太后・外戚か帝か何れを採るかの選択を非常の際に求められたのである。

安帝期の権力配置を見ると、とりわけ注目されるのは鄧太后の執権である。彼女が後漢における女主支配の代表的存在であることは誰も認めないわけにはいかない。そして彼女の儒家思想の素養は女主の中でも出色である。「殤帝生始百日、后迺迎立之。尊后為皇太后。太后臨朝」と殤帝を摂政し、安帝も少年であったので、継続して「臨朝政」した。宦官孫程は中黄門として太后の長樂宮において勤務した。注によると、「東觀自此已下十九人、与程同功者皆叙其所承本系。蓋当事史官懼程等威權、故曲為文飾」とあって、太后を背景にした孫程ら側近の威權が強かった事が解る。兄の鄧騭は妹が貴人から皇后になるに及んで、郎中から虎賁中郎將となり、延平元年には車騎將軍儀同三司となって幕府を開いた。太后と騭は協同して安帝を擁立し「兄弟常居禁中、騭謙遜不欲久在内、連求還弟。歳余、太后乃許之」（後漢書十六）とあるように、兄弟は太后の左右にあったが、内朝に永く居ることを求めず、やがて外征し、その功績で大將軍に就く。彼は「嵩節儉、罷力役、推進天下賢士、何熙・設諷・羊浸・李郃・陶敦等列於朝廷。辟楊震・朱寵・陳禅置之幕府。故天下腹安」（後漢書十六）とあって、外朝を基軸とする皇帝支配を行った。この時、宦官孫程・曹騰も太后を補佐した。「鄧太后以騰年少謹厚、使侍皇太子書、特見親愛」（後漢書卷七十八）とある。全体としてその統治は、太后・大將軍・宦官三者の協力する安定性が認められる。

〈3〉 順帝が東宮にあった際、側近にあった曹騰は「及余即位、騰為小黄門、遷中常

侍」(後漢書卷七十八)と桓帝が太子の際、彼を親愛した経緯があった。その為、中常侍から、やがて大長秋に移り、特進侯を加えられる。そして、彼は帝の側近として海内の名人を推挙したのである。虞放、辺韶、延固、張温、張奐、堂谿典らである。桓帝の即位時、「時年十五、太后猶臨朝政」(後漢書七)とあって梁太后の臨朝が続くが、順帝が建康元年に崩じた後、沖帝の時にも「沖帝始在緇襦」(後漢書三十四)のため猶、太后が臨朝し、更に質帝が立った時も亦「猶秉朝政」(後漢書十下)と、引き続いて女主による支配を行った。これが順烈梁太后である。順帝の時期、太后の兄、梁冀は大將軍の位置に就いていたが、王先謙は注において「司馬光云、成帝不能選任賢俊、委政舅家可謂闇矣。猶知王立之不材棄而不用。順帝授大柄授之后族。梁冀頑嚚凶暴著於平昔、而使之繼父之位、終於悖逆蕩覆漢室、較於成帝闇又甚焉」と評している。梁太后の政治は「好史書、九歲能誦論語、治韓詩、大義略舉」という若年時の儒家的素養によって「太后夙夜勤勞、推心仗賢委任大尉李固等、拔用忠良、務崇節儉、其貪叨罪惡多見誅廢。分兵討伐群寇消夷、故海內肅然、宗廟以寧」(後漢書十下)と外朝の優れた臣下を用いて、海内安定の効果をえた。しかし、梁太后の兄の冀が「鳩殺質帝、專權暴濫・・數以邪說、疑誤太后。遂立桓帝而誅李固。太后又溺於宦官、多所封寵、以此天下失望。和平元年春歸政於帝」(同 前)とあって、横暴な振る舞いがあった。そして太后が臨朝したのは建康元年から和平元年までの六年間である。太后統治の当初は宦者曹騰を用いて、外朝の名士を拔擢し、正しい政治を推進したが、兄・梁冀の専權に影響されて、太后自身も宦官に溺れるなど変貌してしまい、従前の路線を維持することが出来なかった。宦官曹騰は「用事省闈三十余年、奉事四帝、未嘗有禍」(後漢書卷七十八)とあって権力の乱用はなかった。例えば、益州刺史だった种嵩は後、司徒に就くが「告賓客曰、今身為公、乃曹常侍力焉」と曹騰の支援に感謝している。皇帝・皇太后・宦官・外朝の四者の関係は梁氏支配の後期を除いてはほぼ安定していたと言えるであろう。

桓帝期の権力配置を見ると、宦者曹騰が四帝に侍したとあるが、彼は外朝に名士を撰んで官位を付与する。梁太后も亦、儒家的素養が豊かであり、李固を三公に充て、忠良な人士を用いた事によって「宗廟寧し」と評価されるように、安定した政治を維持した。只、問題を起こしたのは太后の兄・梁冀であって、大將軍の高い位置を背景に上記の外朝を抑えこんだ。そして、皇太后をも抑制して彼女を誤った方向に導いたと言う。冀一門を見ると「前後七封侯、三皇后、六貴人、二大將軍・・窮極滿盛、威行内外、百寮側目、莫敢違命。天子恭己而不得有所親豫。帝既不平」(後漢書三十四)と言うように大きな勢力を誇示し、専制的政治を敷いている。桓帝はこれを快く思わなかったために、中常侍単超等五人と計ったうえ梁冀の印綬を奪って、彼を自殺に追い込んだのである。概括するならば、皇帝が宦官と計って、大將軍を排除したケースに当たるであろう。

(4) 延熹二年に梁太后が崩じると、先述のように、桓帝が宦者唐衡を呼び、太后兄・梁冀を誅殺する計画を伝え、そこに単超・左悺・徐璜・具瑗と言う中常侍と小黄門史らが血盟して集った。「於是、詔収冀及宗親党与、悉誅之」(後漢書十下)とあるように

クーデターを決行して、それに成功する。これに加盟したメンバーはそれぞれ封侯され「世謂之、五侯」とあって「自是、權歸宦官、朝廷日乱矣」と記されるように、以後の宦官支配の契機となった。宦者侯覽も同様、中常侍で「託以与議誅梁冀功、進封高郷侯」（後漢書卷七十八）とあって梁氏を討つ功績があったので、爾来いよいよ放縱となるとともに、宦官を批判する外朝の李膺・杜密・張儉らを捕らえ、彼らを夷滅するに至る。永康元年十二月になって桓帝が崩じ、靈帝が即位するけれども、その年齢が十二歳であったので、桓思賢太后が「臨朝定策」した。その後、上記、宦官たちを誅する事を企図した後父・大將軍武に対し、「節与長樂五官史朱瑀、從官史共普、張亮、中黃門王尊、長樂謁者騰、是等十七人、共矯詔以長樂食監王甫為黃門令、將兵誅武・蕃等」（同 前）とあるよう、宦官が結束して武等と闘い勝利を収めた。宦官は事前に「瑀等陰於明堂中、禱皇天曰、竇氏無道、請皇天輔皇帝誅之、令事必成、天下得寧」と、天に祈りを捧げたとの記述がある。それによると、宦官達は皇帝を補佐するために、この闘いに臨んだと信じていた事が窺われる。

竇武は「入白太后、遂徵立之、是為靈帝。拜武為大將軍、常居禁中・・武既輔朝政、常有誅翦宦官之意。太傅陳蕃亦素有謀、時共会朝堂。蕃以私謂武曰、中常侍曹節・王甫等、自先帝時、操弄国権、濁乱海内、・・今不誅節等、後必難囚。武深然之。蕃大喜以手推席而起、武於是、引同志尹勲為尚書令劉瑜為侍中馮述為屯騎校尉。又徵天下名士廢黜者、前司隸李膺、宗正劉猛、太僕杜密、廬江太守朱寓等、列於朝廷・・共定計策。於是、天下雄俊、知其風旨、莫不延頸・・会五月日食、蕃覆説武曰、・・蕃以八十之年、欲為將軍除害。今可且因日食、斥罷宦官、以塞天變。又趙夫人、及女尚書旦夕乱太后、急宜退絶。惟將軍慮焉。武乃白太后曰、故事黃門常侍、但當給事省内典門戸主、近署財物耳。今乃使与政事、而任權重、子弟布列、專為貪暴、天下匈々・・宜悉誅廢以清朝廷。太后曰、漢来故事、世有但當誅其有罪、豈可尽廢邪」（後漢書六十九）とあるように始めから、大將軍の地位にあった竇武を中心に外朝官を結集して、宦官排除を企図していた。しかし、太后は有罪を誅するのが漢の故事であると主張する。惠棟の注には「統漢書云、太后以為此皆天所生。漢興以来、世世用事国典常、故何可廢邪。但當誅惡耳」とあって、太后は有罪者ならばともあれ、宦官をすべて廢するのは反対だと述べている。「時中常侍管霸頗有才略、專制省内。武先白誅霸及中常侍蘇康等竟死。武覆数白誅曹節等。太后猶予未忍。故事久不發」（同 前）とあって竇武は曹節の誅殺を求めるが、太后は躊躇し猶予して時を過ごす。その間、逆に宦者朱瑀が「盜發武奏、罵曰、中官放縱者自可誅耳。吾曹何罪而當尽見族滅、因大呼曰、陳蕃・竇武奏、白太后廢帝為大逆。乃夜召素所親壯健者・長樂從官史共普・張亮等十七人・・誅武等」（同 前）とあるように、竇武等を誅することを企図した。そして「武不受詔、馳入歩兵營・・与武对陳、甫兵漸盛、使其士大呼武軍曰、竇武反、汝皆禁兵、當宿衛宮省、何故随反者乎・・於是、武軍稍稍帰・・武紹走・・皆自殺」（同 前）とある結末になった。

一方、陳蕃の場合は、宦官批判の上奏を行い、「帝得奏愈怒、竟無所納朝廷。衆庶莫不怨之宦官、由此疾藩彌甚・・猶以蕃名臣不敢加害」（後漢書六十六）とあって、帝の不興

を買うけれども、この時点では陳蕃は罰せられていない。永康元年になって桓帝が崩じた。その時「竇后臨朝詔曰、・・前大尉陳蕃忠清直亮、其以蕃為大傳錄尚書事」（同 前）とあるように、陳蕃は太后には良好な評価を受けていた。しかし「中常侍曹節・王甫等与共交構諂事太后。太后信之。数出詔命有所封拜、及其支類多行貪虐。蕃常疾之。志誅中官。会竇武亦有謀」（同 前）とあるように、太后は一方では曹節らを信任しており、陳蕃の方は宦官を憎んでいたと言う三者の構図があった。陳蕃は上奏して宦官の悪事を言うが、太后はこの奏を容れない。そのため遂に、陳蕃は竇武と共に決起して敗れ、「送黄門北寺獄」の結果を招いたのである。この結果、竇武失脚と共に太后も「遷于南宮」されてしまう。

靈帝期の権力配置を見ると、竇太后は父の武や陳蕃を評価していたが、同時に曹節ら宦官者を信任していた。両者の争いで、太后は逡巡して決断を留保したため、その衝突を避け得なかったと言うのが実情である。

〈5〉 宦官呂強は靈帝の時、上疏して次のように云う。「伏聞中常侍曹節・王甫・張讓等・・宦官祐薄、品卑人賤、讒諂媚主・・而陛下不悟、妄授茅土・・」（後漢書卷七十八）と宦官を批判し、その用う可からざるを云うが、「帝知其忠而不能用」（同 前）と退ける。彼はまた、「旧典、選挙委任三府、三府有選、参議掾属、諮其行状、度其器能、受試任用、責以成功。若無可察、然後付之尚書。尚書举劾、請下廷尉、覆案虚实、行其誅罰。今但任尚書、或復勅用。如是、三公得免选举之負、尚書亦復不坐、責賞無歸、豈肯空自苦勞乎」とあって、旧来のように外朝の三府が主導して選挙をするよう意見を述べている。そして中平元年、黄巾賊が起こり「強欲先誅左右貪濁者、大赦党人・・帝納之、乃先赦党人。於是、諸常侍人人求退・・中常侍趙忠、夏惲等遂共構強、云、与党人共議朝廷・・帝不悦・・強・・遂自殺」（同 前）とある。呂強では上奏文に「穀梁伝」を引用するなど、儒家の素養があり、その立場から貪汚な宦官を批判している。呂強の伝には「時宦者濟陰丁肅、下邳徐衍、南陽郭耽、汝陽李順、北海趙祐等五人、稱為清忠、皆在里巷、不爭威權・・」とあり、この中で趙祐は「博学多覽、著作校書、諸儒稱之」とあって、宦官中にも学問を嗜む人が現れているのは注目される。

〈6〉 宦官張讓・趙忠二人は桓帝の時、小黄門の地位にあり、趙忠は梁冀を討った功績によって都郷侯に封ぜられた。靈帝代では兩人とも中常侍に就任しており、曹節・王甫と表裏一体をなしていたと言われる。この時、讓・忠らと共に十二人が中常侍のメンバーで、「封侯貴寵、父兄子弟布列州郡、所在貪殘、為人蠹害」（後漢書卷七十八）とあって、共に悪事を働いたと言う。ために「郎中・張鈞上書曰、竊惟張角所以能興兵昨乱、萬人所以樂附之者、其源皆由十常侍多放父兄・・侵掠百姓・・宜斬十常侍・・以謝百姓・・」（同 前）と、張鈞から宦官の排除を求める上奏が為される。しかし帝は「帝怒鈞曰、此真狂子也。十常侍固當有一人善者不」（同 前）とその上奏を認めなかった。しかし「遂誣奏鈞学黄巾道、収掠死獄中、而讓等实多与張角交通」と、鈞は黄老道を学んだとされて

獄中で死んだが、実は常侍の方が黄巾と通じていたと言われる。その為「帝因怒詰讓等曰、汝曹常言党人欲為不軌、皆令禁錮。或有伏誅。今党人更為国用、汝曹反与張角通、為可斬未・・云故中常侍王甫、侯覽所為・・帝乃止」(同 船)と帝は怒っているが、中常侍は先輩の王甫・侯覽の仕業だとして自己弁明して処罰をま免れたとある。この頃、朝廷では萬金堂、南宮玉堂を造営しているが、宦官讓・忠はこうした宮室造営のため「説帝令斂天下田畝税十錢」(同 前)と、百姓から収奪してその資金に充てた。それにも拘わらず帝はなおも「常云、張常侍是我公、趙常侍是我母。宦官得志、無所憚畏、並起第宅、擬擬宮室」(同 前)と宦官を信任していた。そして中平六年に帝が崩じ、「中軍校尉袁紹説大將軍何進、令誅中官、以悦天下・・捕宦官無少長、悉斬之」(同 前)とあって、宦官の総てが処分されてしまう。

靈帝代の権力配置を見ると、皇帝と宦官の両者によって総ての政務が取り仕切られる形態になっており、これに対して外朝官らは殆ど力を発揮出来なかった。先の両者の収奪によって、貧困な大衆は挙って黄巾の勢力に支持を寄せたため、後漢王朝は衰滅するに至った。

〈結語〉 後漢代は光武帝が天下を統一して王朝を樹立したが、前漢より盛んになった儒家の学説と讖緯思想を交える事によって、これを統治思想の軸心とした。儒家は本来、人道を主とし、天道についてはこれを敬して遠ざける立場にあったが、光武が天命としての讖を信じたので、儒家・桓譚らの厳しい批判が生じた。これに対し、やがて賈逵によって両思想の妥協が計られた。天・人融合の思想である。このようにして、光武より三代まで皇帝支配は安定していたが、以後、皇太子から皇帝に即位する時点における若年者が多かったと言う事態によって、それに代わって、皇太后が臨朝称制する局面を迎えた。所謂「女主」の支配である。

- (1) 和帝の場合では、皇太后の兄弟がそれぞれ大將軍と中常侍の位にあったが、宦官では帝(孫程)と太后(蔡倫)の側に、比重が異なって連携していた。帝の場合は嘗て太后に養われた経緯があり、その心情に拘束された点が認められる。これらを全体的に俯瞰すると、各々が血縁的紐帯を中心として、それに宦官が結ばれていた統治集団であったと言えよう。
- (2) 安帝期では鄧太后が安定した統治を行うが、それは側近の中常侍曹騰を介して、外朝に名士を抜擢し官に就けると言う方法が採られたためである。太后の儒家思想の発露と言える。兄に当たる鄧騭は車騎將軍から大將軍に就き幕府を開くが、彼は内朝に永く居るのを好まず、幕下に賢士を登用して、太后の政治支配を安定せしめた。こうしてこの時代は和帝期に比して血縁関係に依存する統治はより稀薄だと言えよう。鄧太后の劉氏擁護は外朝においても当然、賛同する所であって、安帝は表面には出ないが、それでも安定した政治局面を現出した。しかし、太后没後は江京一派と樊豊一派とが宦官同士で対立しており、外朝の重臣楊震を協同で排除すると共に、北郷侯を擁立する閭頤が樊豊ら一派を排除しつつ江京らと協同して、北郷侯

の就位を確実にせんと試みた。しかし、元皇太子の済陰侯を支持する宦官孫程らが閹頭一派を排除する実力行動を取って、済陰侯を就位させることに成功した。これが順帝である。

- (3) 順帝期では、梁太后は女主支配を行っているが、それは儒家思想を中心とする政治であった。しかし兄・梁冀が大將軍となって権力を振り、順帝死去後の質帝を毒殺するなど、専制的な振る舞いがあり、多くの人士の擧蹙を買った。一方、宦官曹騰は外朝に名だたる名士を登用して、太后の支配に協力している。しかし後年、兄の影響で太后が正道を外れた為に、天下の失望を買うに至る。やがて後に、桓帝は中常侍单超らと協同して、この梁冀を誅殺して、親政の実を奪回するに至った。
- (4) 桓帝は親政したものの、その実現に功のあった宦官は「五侯」が中心となって専権した。則ち「自是、権帰宦官、朝廷日乱矣」（後漢書卷七十八）とある。桓帝が崩じ、靈帝が即位するが、弱年のため、桓思竇太后が臨朝称制することは恒例の事態であった。后父の竇武は称制の政治を左右する宦官の排除を企図するが、太后本人は罪ある者は別として、総ての宦官を排除するのは反対だとしてそれを認めない。そして宦官・朱瑁が逆に竇武の奏を盗み見して、これが「廢帝大逆」の企てだとして竇武を誅殺するに至る。
- (5) 宦官呂強の場合では、同僚の曹節・王甫らが「品卑人賤」であると批判し、選挙権を尚書から往年の三府に戻すように求めた。呂強は宦官ながら儒家の素養を基に、貪汚な常侍たちを批判したのである。彼の伝記には清廉な五人の宦官が記されている。呂強は春秋穀梁伝を引用しつつ上奏しているように、この頃、宦官らにも学問の素養のある人物があらわれて来ている。
- (6) ただ靈帝期中常侍であったのは張讓・趙忠で、彼らは外に総勢十二人で構成されていた。彼らの父兄子弟が州郡に配置されて「貪殘 為人蠹害」と収奪を事とする事態を招いた。こうして遂に黄巾の乱が起り、その為、後漢王朝は崩壊に至るのである。それは宦者列伝の末尾の「論」に「西京自外戚失祚、東都縁閹尹傾国」とある通りである。

注

「後漢期、皇帝・皇太后の政治と儒家思想」（史学研究第二五六号（2007.6））